

東京女子医科大学学会 第273回例会抄録

日時 昭和63年2月18日(木)午後1時30分より

場所 東京女子医科大学 第2臨床講堂

1. 微小血管吻合における Intravascular Expander の検討 (第4報)

(形成外科)

○桜井 裕之・野崎 幹弘・森岡 康祐
東山 卓嗣・仲沢 弘明・平山 峻

遊離組織移植, または切断指再接における微小血管吻合時, 血管径が小さいことによる吻合手技の難しさ, さらに血管間の口径相異による吻合時の困難は, 臨床上しばしば経験されるところである。われわれは, 血管径が小さいために生じる困難を解決する一策として, intravascular expander を用いて血管口径の拡張を図ることを試み, 既に第30回本学会総会において報告した。すなわち, 直径1mm以下のほぼ同一口径を有する微小血管間の吻合に際し, われわれの工夫した intravascular expander を使用して両方の血管径拡張を行った場合, ①吻合手技が容易となる, ②血管壁の損傷がない, ③開存率の向上, などの結果が得られた。

今回, われわれは, 径の異なる血管吻合時に細い方の血管を intravascular expander を用いて拡大した後に血管吻合を行い, いささか興味ある実験結果を得たので報告する。

実験方法は, ウイスター系ラットの総頸動脈を5~8mm採取し, 大腿動脈に間置した。総頸動脈の血管径0.9~1.2mmに対し, 大腿動脈は0.5~0.9mmと細いため, 吻合時に大腿動脈に1mmの intravascular expander を挿入し拡大操作を行った後吻合を行った。吻合後1日後, 3日後, 7日後に開存率および吻合部の形態について検索を行ない, 拡大操作を行わなかった対照群と比較検討した。さらに拡大された血管内皮細胞の状態を中心に組織学的検索も加えた。

以上の実験から, 血管径の異なる血管間の吻合の際に, intravascular expander を用いることは, 第一に吻合手技が容易となり, かつ確実性を増すため, よりよい開存率が得られた。実験結果につき詳述すると共に, 若干の文献的考察も併せ述べたい。

2. Tissue Expander 法の臨床的検討

(形成外科) ○寺田 伸一・植木伊津美
野崎 幹弘・平山 峻

1976年 Radovan により Tissue Expander 法による軟部組織再建が発表されてから, 早10年がすぎた。当科においても昭和60年8月~昭和62年11月までに105例, 挿入エキスパンダー187個を経験し, follow up も長いものは2年となったので, 今回はこれらの症例について統計的分析を行なった。

対象疾患は, 瘢痕・母斑で69.5%となり, 瘢痕は四肢, 母斑は軀幹に多くみられた。また瘢痕例は10~20歳代, 母斑例は, 10歳未満に多かった。

瘢痕・母斑いずれの場合でも植皮術は donor site に瘢痕を残すだけでなく植皮部そのものも texture match, color match の点から患者の満足はなかなか得られない。それに反し, Expander 法は donor site を必要とせず, 瘢痕を他部位に残すことがなく, texture match, color match の点でも理想的といえる。しかし, expanded skin の病態生理学的機序に関して不明な点も多く今後とも症例を重ね検討を加えていきたい。

3. 色素レーザーによる単純性血管腫の治療

(形成外科)

○竹内 正樹・村山 清子・安部 紀子
若松 信吾・平山 峻

単純性血管腫の治療は従来アルゴンレーザーを